

産学連携で社会に学ぶ金城学院大学

金城学院大学では、社会貢献の一形態として産学連携を実施。
 大学が蓄積した研究成果である知的財産を社会に還元し「開かれた大学」をめざしています。
 今回は生活環境学部食環境栄養学科の清水ゼミが企業とのコラボ弁当、
 環境デザイン学科の弓立ゼミが介護施設の内装デザイン、
 国際情報学部国際情報学科の庫元ゼミが和菓子の商品開発で産学連携を実施。
 それぞれの成果をご紹介します。



マックスバリュとの共同開発弁当

Collaboration

栄養学の知識を活かし、老若男女が喜ぶお弁当を開発

食環境栄養学科の清水ゼミでは、マックスバリュ中部株式会社の企画「ちゃんごはん弁当」で、夏のお弁当を共同開発しました。参加したのはゼミの4年生、丸山莉穂さんと仲山七虹さんチームと伊藤亜弥さん、島田知果さんチーム。健康に配慮し、旬の食材を使う弁当に取り組みました。



丸山さんと仲山さんは野菜をたっぷり使った弁当を企画。「愛知県の野菜摂取量は全国ワースト1。少しでも改善したいと思えました」とゴマだれで味わう夏野菜そうめんを考案。夏でも食べやすいイサキの梅しそフライやれんこんのマリネなどを添え、1日に必要な野菜の1/3を摂取できる弁当を考案しました。

伊藤さんと島田さんは魚を使った弁当に取り組みました。「若い人にも食べてもらいたい」と彩りがきれいなピカタに仕上げ、トマトソースでボリュームアップ。また、さまざまな世代に喜ばれるよう、野菜や豆類も豊富に使用。これら

の弁当は6月、7月に販売、当日は四人とも店頭販売を行いました。

今回の開発では「企業ニーズとのすり合わせが難しかった」と仲山さんは話します。丸山さんは「コストや材料が限られ、苦労しました」と振り返ります。また「お客さんに自分の思いを話し、買ってもらったときは嬉しかった」と伊藤さん、「原価、作る側、お客さんの三方向から考えるのは大変でした」と島田さんもいいます。



(左) ごおドレスィングで食べるそうめん弁当
 (右) アンピカタ弁当

多くの人の意見を聞き開発することで、多面的なものの見方を学びました。

デザインの学びを活かした空間へ

株式会社ジェネラスが運営するサービス付き高齢者向け住宅「スワーフ植田一本松」。その内外装デザインに生活環境学部環境デザイン学科の弓立ゼミの4年生が取り組みました。

まずは、事業内容を把握するため、高齢者施設(デイサー

ビス・リハビリ・ショートステイ・住宅型有料老人ホーム)の見学を行いました。その見学で感じたこととして、濱田千智さんは「部屋に色味が少ない印象を受けた。もっと視覚から元気になれる空間に変えたい」、代財未菜さんも「今より明るい雰囲気施設のしたい」と話します。みんなで話し合った結果、入居する方々



に喜ばれるように「今までの施設概念にとらわれない、明るい空間づくり」をめざして取り組むことになりました。

学生たちは介護される側の視点を意識しつつ、何通りものパターンを考え、外装をはじめ、内装のカラーコーディネートを提案。施主、設計者、施工主と何度も打ち合わせをしながら企画をすすめました。濱田さんは「企業の方からは、業界の常識にとらわれない若い感性を求められ、その加減や、実際の色目の調整に苦労しました」と話し、吉田奈央さんも「イメージを伝えることや、既製品との色の組み合わせに苦労しましたが、実際のお仕事に近い経験ができてよ



かったと思います」と振り返ります。代財さんは「仕事には期限があり、その期限通りにこなすのが大変でした。完成見学会ですでに入居者がまぼ定員に達していて嬉しかったです」と達成感を感じたようです。「責任感をもって社会とかかわっていくことを感じてほしい」という弓立先生の想いを実現した、成果のあるプロジェクトとなりました。



青柳総本家との生ういろいろ開発

マーケティングの学びを活かしてニーズを把握

いろいろで有名な名古屋の老舗ブランド・株式会社青柳総本家と国際情報学部国際情報学科の庫元ゼミがオリジナルいろいろの開発に取り組みました。

制作プロジェクトはチームリーダーの生田奈緒子さんとゼミ長の真弓渚さんを中心に進行。まず最初に綿密なリサーチを実施しました。その

結果、親世代から和菓子にふれる機会が少なくなっていることが判明。また同世

代に向けた調査では、「和菓子は敷居が高く気軽に食べられない」などの意見が聞かれました。次にゼミ生全員で会議やプレゼン、工場見学を経て製品への理解を深めつつ開発をすすめました。

パッケージに金城学院のロゴを入れるなどデザインも検討。「華やかさや高級感を出すことに苦心した」と生田さんと真弓さんは話します。

完成した生ういろいろは赤ワイン、大納言小豆、桜の三層仕立て。手軽にその場で食べられる「串ういろいろ」を用意したことも功を奏し、金城祭では約1時間30分で売り切れるほどの人

気でした。「企画し、製品化をすすめるという、現場でしか得ることのできない貴重な経験となりました」と生田さんは振り返ります。また「企業の方から多くのアドバイスをいただき、課題解決への考え方を学ぶことができました」と真弓さんも話します。庫元先生も「初めてにしては洗練された商品となりました。データをたくさん取って提案してきたのもよかつ

たと思います」と学生の取り組みを高く評価しました。

今後は本格的な商品化に向け、より高い基準をめざしマーケティングをすすめていきます。

